

ジェフリ・チャーサー作

トゥローイラスとクリセイデ（その六）

宮 田 武 志 訳

「クリセイデ、真相はお前が知ってるんだ。禍はすべて福に転じるものだよ、だって、お前の心次第で火が消せるんだからね。まさにそのとおり実行するがいいさ、それが一番だと思うね。」

「やって見ますわ、明日きつと。是非とも充分に。」

八五〇

「明日だって？ なんとまあ、結構なことぞ！ いやさ、とんでもない、だって、クリセイデ、学者賢人も言ってるじゃないか、危険は遅滞によつて招来せらるるものなりつてね。そうだ、そんな因循は山櫨さんざしの実にも値しないよ。ねえ、クリセイデ、すべて物事には必ず潮時というものがあるんだ。部屋やホールが燃えているという時にだね、どうして蠟燭が藁の中に倒れ込んだらうなんてことを、みんなで不審がったり議論したりしてみたつてはじまらないじゃないか、それよりも、逸早く火を消さなくちゃ。全八六〇くのところ、こんなことをやってる間に被害甚大、つぐみよ、あばよつて訳さ。ねえ、クリセイデ、こう言っても悪く思わないでもらいたいんだが、つまりだね、トゥローイラスさんがあのようにお悩みになつてゐるのに、お前が一晚中平気でいられるとすればだね、お前はこれまで全然あの方に愛を感じなかったことにならないかな、こんなことは今二人の間だけで言うんだが。いや、お前がそんなことをする筈がないよ、たしかに。あの方のお命を一晚中危険に曝しておくなんて、お前ともあろうものが、そんな馬鹿な真似をする筈がないさ。」

「わたしがあの方に全然愛を感じなかったって仰有るんですの？ 愛しましたわ、叔父様八七〇にはご経験がないくらい。断然そうですわ。」

「じゃあ、ぼくも断然友情のあるところを知ってもらふことにしよう。お前がぼくを引合いに出すからこんなことを言うんだが、ぼくはあの

方が悲しんでらっしゃるのを傍観する気持になるくらいなら、今後すべての喜びを失う方がましだよ、トゥロイの町の財宝全部にかけてそう神に祈るよ。ところで考えてご覧、愛人たるお前がだね、つまらない理由からあの方のお命を一晚中危殆に瀕せしめるとすればどうだろう。正直八八〇に言わせてもらえば、そんなぐずぐずは愚かさから、また、悪意から出たと言うべきだよ、たしかに。そうだ、卒直に言うが、お前があの方をお苦しませて平気でいられるとすれば、それは親切な行為とも慇懃な行為とも言えないよ。」

「叔父様にしていただきたいことがありますのよ、それできつとあの方のお悩みをなくして差上げることが出来ると思いますわ。ここに青い指輪がありますから、これをあの方の所に持って行っていただきたいんですの。この指輪くらいあの方のお気に召すもの、あの方のお心を和げてくれるものはないと思いますわ、わたし自身のほかには。その時あの方に仰有っていただきたいんですの、お悲しみになる理由は全然ございません、それは明日になればきつとお分りになりますって。」

「指輪八九〇だって？ とんでもない。クリセイデ、死んだ人を生き返らせる宝石がその指輪に嵌めてなければ、なんにもならないよ、そんな指輪をお前が持つてる筈はないしさ。どうも分別がなくなったようだね、お前。お気の毒なことだ。ああ、時間を潰しちゃった。ぐずぐずすることだけはご免だよ。お前知らないのかい、気高くてすぐれた心の持主は、ちっとやさつとで、泣いたり泣き止んだりしないものだってことをさ。馬鹿な奴が妬いて暴れるくらいのことなら問題じゃない、悲し九〇〇んだからって気にもとめないよ。いつか会った時にひと言ふた言尤もらしい言葉を呈するまでさ。だけど今度の場合は全く別だよ。トゥロイラスさんは穏かな、心の優しい方だから、ご自分の悲しみはご自分の命で解決しようとなさるんだ。どんなに苦しくても嫉妬がましい言葉は、ひと言だってお前に聞かせようとはなさらないんだ、これは確かなことだよ。だからだね、クリセイデ、あの方が絶望なさらないうちに、今度のことについてお前九一〇の口からよくお話しすることだよ。お前のひと言であの方のお気持はどうにでも変わるんだから。」

あの方が危険な状態にいらっしゃるってことはこれでお前にすっかり話したわけだ。あの方がここに見えても誰にも分りやしないよ、いや、実際のところ、あの方がここに見えたからって、何も悪いことでもやましいことでもないんだ。それに今夜中ずっと、ぼくがお前の側についてあげるよ。お前もよく知ってることなんだが、トゥロイラスさんはお前の騎士なんだから、お前は当然あの方を信頼すべきだよ。お前さえよければ、何時でもあの方をここにお連れ申したいんだがね。」

今度の事は聞くからに大変いたわしいことでもあり、また、ちょっと聞いただけでは全くまことしやかに思われました。そして、クリセイデは自分の騎士トゥロイラスには深い愛情を感じている上に、彼は人目を忍んで来るそうだし、叔父の家なら安全なようでもありました。このような次第でしたから、クリセイデがあらゆる事情を考慮に入れた上で、トゥロイラスに同情を寄せたとしても、それは全く善意でしたことでもあり、何等怪しむに足りません。クリセイデが叔父に答えて言いますには、

「ほんとうにお気の毒なこと、神様、わたくしの心をお和げ下さいませ。ねえ、叔父様、神様の御恵みによって何とかして差上げられるのなら、わたし喜んで出来るだけのことをして差上げたいと思いますわ。だけど、叔父様にずっとここにいていただく方がいいかしら、それとも、あの方をお呼びするために行っていく方がいいかしら、わたしの判断では分らないわ。むずかしい問題ね、ユークリッドの定理第四十七のように。困ってしまいますわ、全く。」

「いや、クリセイデ、まあ聞きなさい。定理第四十七は劣等生の放校って意味なんだ。この定理はむずかしいだろうよ、だって、劣等生はなまけたり我侭だったりで、勉強しようとしなんだもの。だけど、こんな泣言は、えんどう豆二つにも値しない連中の言うことだよ。お前は頭がいいんだし、それに、われわれのやろうってことは、むずかしいことでもなければ、当然反対されるべきことでもないんだ。」

「じゃ、叔父様、お好きなようになさって。だけど、わたしまず起きなきゃ、あの方がいらっしゃる前に。それから、わたし全くお二方を信頼し切ってるんですし、お二方はご分別がおありになるんですから、後生ですわ、わたしは名誉を傷つけられない、あの方にはご満足いただけるってことになるように、慎重にご行動願いたいですの。だって、わたしここでは全然叔父様の掌中にあるんですもの。」

「よくそう言ってくれたね、クリセイデ。見上げたものだ、お前の賢明な優しい考え方は。だけど、じっと横になったまま、あの方をここでお迎えるんだ、あの方が見えるからって、跳ね起きることはないよ。お互に悲痛な気持を慰め合うんだ、ぜひ。ああ、ヴィーナスを讃えよう。間もなくわれわれはみんな楽しくなるんだから。」

待つ程もなく、トゥロイラスが深刻な面持でクリセイデの枕頭に跪き、いとも慇懃に挨拶しました。けれども、ああ、クリセイデは見聞に真赤になってしまい、突然トゥロイラスにはいつて来られたため、ただのひと言すら急には出て来ないのでした、首を刎ねられようが、とても駄目です。何事にも察しのいいパンダラスのこととて、彼はすぐさま冗談口を利きながら言いました。

「クリセイデ、ご覧よ。この方でもお出来になるんだ。跪くことがさ。ねえ、全くご殷懃なことじゃないか、この方は。」
そう言いながら彼はクッションを取りに走りましたが、更に言葉をつづけました、「どうぞお好きなだけお跪き下さい。そのうちお心が鎮まればいいんですが。」

クリセイデはお立ち下さいとも何とも言葉をかけなかったのですが、悲しみの為に忘れたのでしょうか、それとも、騎士たる礼として、当然の義務だと考えたのでしょうか、わたしにはよく分りません。ともあれ、大きな溜息をつきながらではありましたが、トゥロイラスに接吻の喜びを与えてのち、もう結構ですからお掛け下さいと言葉をかけたことは確かです。パンダラスは、「さあ、うまくやるんだよ、滑り出しを。クリセイデ、お前のベッドの片側に充分深くお掛けいただきなさい。そうした方がお互に話が聞き易いからね」と言いながら、暖炉に近づいて蠟燭を手に取り、昔物語に目を通すような振りをしました。^{九八〇}

トゥロイラスの真の愛人たるクリセイデ、確実な根拠に立って潔白なクリセイデは、自分の僕であり騎士である彼が、自分の誠実を疑う筈はないと思ったのですが、やはり、彼が苦しんでいることだの、彼の馬鹿げた態度も結局、恋情がその原因なのだということだのを考え合わせ、彼の嫉妬についてこう語りました。

「愛する殿下、わたくしが殿下のお苦しみにもどうしてもご同情申し上げずには居られないのはなぜでございましょう。誰一人として逆らうことの出来ない、逆らってはならない、すばらしい恋の力がそうさせるのでございます。そうしてまた、殿下が毎日大変ご誠実にお仕え下さるということ、殿下のお心はすべてわたくしのものだということ、このようなことをしみじみ心に感じ、目に見たからでございします。終始変わらぬ殿下のご親切、ああ、愛する殿下、わたくしの騎士様、お礼の言葉とて尽くせないののでございますが、申し述べられる限りのお礼の言葉を申し述べたいと存じます。これまで、智慧のかぎり、力のかぎりを尽くし、全心を傾けて、殿下に真心を捧げてまいりましたが、^{一〇〇〇}どんなに苦しくても何時までも変わらない積りでございます。そのことはやがて必ず証拠立てられることとでございましょう。」

愛する殿下、わたくし何のことを申し上げようとして居るのでございましょう。そのことを今申し上げますから、万一、わたくしが殿下に対して不平がましいことを申し上げましても、お気を悪く遊ばさないように、と申しますのは、わたくしたちの心を重くしている悩みを跡形なく無くしてしまつて、わだかまりをすっかり解きたい為でございしますから。愛する殿下、嫉妬が、ああ、あの毒蛇が、^{一〇一〇}どうして謂われもなく、こ

のように殿下のお心の中に忍び込んだのでございましょう。その毒を取り除きとう存じます。一匹の毒蛇が、その片鱗が、立派な場所にその隠れ場を見つけたとは、ほんとうに悲しいことでございます。ジョーヴの神様が忽ちのうちに、その毒蛇を殿下のお心から追い払って下さいますように。ああ、自然をお造りになったジョーヴの神様、罪のない者が苦しみを受け、罪を犯した者が全く罰を免れるということ、そのようなことが神様のご名誉になることでございましょうか。ああ、身^{一〇二〇}に覚えもないのにご嫉妬遊ばす殿下を、お責めすることが許されますならば、声を大きくして殿下をお責め致しとう存じます。

まことに歎かわしいことがございます。それは、今の世の人たちが、そうだ、嫉妬は恋愛だ、と口癖のように申すことでございます。そうして、一グレーンの恋がその中につき込まれているからといって、一ブッシェルの悪徳を全く許そうとすることでございます。そのような悪徳は恋愛、憎悪、憤怒のうちのどれに一番よく似ていることでございましょう。それは天にまします神様がご存じのことでございます。そのどれであるかに依って、その悪徳は名前を附けられるべきでございましょう。けれども確かに、ほかの嫉妬に比べれば許すことのできるような嫉妬がございます。それは例えば、尤もな原因がある上に、相手に対する同情から、とりとめのない想像がすっかり抑えられているために、言動が宜しきを失うようなことが殆んどなくて、自らの苦悩を忍耐強く飲み込んでしまうような場合でございます。このような見上げた態度の場合には、これを許すべきでございましょう。また、怒りと怨みに充ち満ちて抑えようもないというような嫉妬もございます。けれども、愛する殿下、有難いことだと申しましょうか、殿下の場合はそうではございません。ですから、殿下のお悩みは、あり余るご恋情と絶え間のないご心痛によって惹き起された幻想とお呼びする外はございません。その幻想のためにお心が乱れるのでございましょう。殿下のお悩みは大変お気の毒なことだと存じますけれども、その為にわたくしが怒るというようなことは決してございません。

これはわたくしの義務でもあり、殿下のお心をお休めする為でもございますが、何処でもお気に召す所で、探湯^{くがたち}でも誓約でも籤占いでも、そのほかお気に召すどのような方法でも結構でございます。ぜひ真偽のほどをお試し下さいませ。それが一番いいことだと存じます。そうして、わたくしにやましい所がございますならば、わたくしの命をお取り下さいませ。ああ、わたくしこれ以上どうすればよろしいのでございましょう、どう申し上げればよろしいのでございましょう。」

このように言い終るや、きらきら光る涙が新たに一しずく二しずくクリセイデの眼から流れ落ちましたが、更に言葉をつづけて言いますには

「ああ、神様、クリセイデがトゥローイラス様に対して不誠実なことを考えたことも行ったこともまだ一度もないということ、そのことはあなたが存じでございます。」

そう言いながら、クリセイデは頭をがくりとベッドの上に伏せ、シートでくるんで激しく溜息をつき、そのまま沈黙して、それ以上一言すら言わないのでした。この悲しみを鎮めるために神の御恵みあれ！いや、神は御恵みを垂れ給うことでしょ、至大の力を持ち給うのですから。

わたしの経験したところでは、霧の深い朝の後には、しばしば楽しい夏の日がつづき、冬ののちには緑の五月が訪れるのです。はげしい攻撃ののちには勝利が待っているということは、人びとの常に見るところであり、また、物語で読むところなのです。

クリセイデの言葉を聞き終るや、トゥローイラスは眠る気にもなれないのでした。これは確かなことです。といいますのは、愛人のクリセイデの泣く様を見、泣く声を聞いていますと、彼は鞭で打たれるように思われるどころか、クリセイデが涙を流す度毎に、死の締金が心臓のあたりに忍び込んで来て、締めつけるように感じられたからです。彼は心の中で悪い時に来合せたものだと思い、嫌な気持ちになりました。そうでも悪い状態が、今やますます悪い事態に立ち至り、これまでに払って来た努力が、すべて水泡に帰したように思われ、まさにわが身の破滅だと感じました。ああ、パンダラス君、君の企ては何の役にも立たないじゃないか、ああ、辛いことだ、そう思いながら、頭をがくりと落して

膝をつき、悲しそうに溜息をつきました。物が言えるどころではありません。全く生きた心地もしなかったのです。悲しみを和げてくれるべきクリセイデを怒らせたのですから。けれども漸く口が利けるようになって言いました。

「馬鹿なことを企てたが、たしかにぼくに責任はないんだ、事の全貌が知れば分ることなんだが。」

悲しみのために胸がつまって眼からは涙の一しずくさえ流れ出ないのです。からだ中の元気が掻き乱され、押し潰されてぐったりしてしまいました。悲しみも、恐れも、いや、感情という感情がすべて消え失せてしまつて、彼は突然、意識を失ってしまいました。まことに悲惨な光景です。肅として声もありません。パンダラスは大急ぎで立ち上りながら言いました。

「クリセイデ、静かに！ 声を立てたら万事休すだよ。驚くことはないんだ。」

けれども全くのところ、最後に彼は、遮二無二トゥローイラスをベッドの中に押し込んで叫びました。

「この野郎、これが男の意気地なのか。」

シャツもあらわになるほど、彼の衣服を引き裂きながら、更に叫びました。

「^{二〇〇}クリセイデ、今、われわれを助けてくれなければ、お前のトゥロイラスさんのお命がなくなるんだぞ。」

「畏りました、方法さえ分れば、お助け致しますわ、喜んで。まあ、ほんとうに悲しいこと。」

「うん、クリセイデ、殿下のお心に刺さった棘を引き抜く気があるなら、すべてをお許し致しますって申し上げるんだ。それで万事解決さ。」

「ええ、喜んでそうさせていただけますわ、何をさておいても。」

そこでクリセイデは、トゥロイラスの耳許で誓いました。

「^{二二〇}愛する殿下、わたくし怒ってなどいませんわ、ほんとうに。お誓い致しますわ。」

そして、ほかにも沢山誓いの言葉を重ねたのち、更に言いました。

「何か仰有って下さいませ、わたくしでございますよ、クリセイデですよ。」

けれどもすべては無駄でした、トゥロイラスはまだ正気に帰りません。そこで二人は、彼の脈の打つ手首や掌を擦ったり、両方のこめかみを濡らしたりしました。彼を苦しい束縛から解くために、クリセイデは幾度となく接吻しました。要するに、彼を蘇らせようと、クリセイデはあらゆる努力を尽くしたのです。遂にトゥロイラスは息を吹き返し、^{二二〇}それからすぐ意識を回復して、判断力と理性を取り戻しましたが、極まりが悪くて仕方がないといった様子です。意識が一層はつきりして来ると、彼は溜息をつきながら言いました。

「ああ、一体どうしたって言うんですか。」

クリセイデは答えました。

「どうしてこのような間違ったことをなさるのでしょう。これが男の方の悪戯っていうのかしら？ トゥロイラス様、なぜ、このように嫌なことをしようと遊ばすのでしょうか。」

こう言いながらも、両腕を彼のからだにかけて、すべてを許し、幾度となく接吻しました。^{二二〇}トゥロイラスはクリセイデに感謝してのち話しかけ、心を和げるに逃え向きの、四方山の話をしました。クリセイデは気の向くままに受け答えして、やさしい言葉で彼を喜ばせ、幾度となくその悲しみを慰めたのでした。

パンダラスが言いますには、

「どうやら此処ではお役に立たないようだな、この蠟燭の火とぼくとは。蠟燭の火は病人の眼によくないですよ。ところで、全くのところ、お二人の仲はまるく納まったんですから、お二人とも心のもたまたは、きれいさっぱり忘れて下さいよ。」

こう言いながら、彼は蠟燭を暖炉の所に持って行きました。それから間もなくクリセイデは、実はその必要もなかったのでしょうか、取っておきたいと考えていた誓の言葉を、とにかくトゥローイラスから取り終ると、ベッドから起きるようにとトゥローイラスに乞わなければならぬような恐怖も感ぜず、また、乞うべき理由もないように思われました。多くの場合、誓約など大げさなことは、しないで済むものです、といひますのは、すべて、人を深く愛するほどの人なら、その心が高潔でない筈はないと思われるからです。ともあれ、実際のところ、嫉妬すべき理由など全然なかったのですから、^{一一五〇}どんな男に何処でどうして、トゥローイラスが嫉妬を覚えたのが、すぐ知りたいものだとかクリセイデは思ったのでした。そして、嫉妬を覚えるに至った怪しい点があるなら、それを充分話していただきたいと乞ひ、もしそれが出来ないのなら、たしかに自分を試そうとする悪意に出でたのだと言って、彼を責めたのでした。簡単に申しますと、トゥローイラスはとやかく言わないで、愛人の命令に従わざるを得なかったのです。そして、なるべく事を荒立てないようにと、出鱈目をでっち上げなければならなかったのです。そこで、

さる饗宴の席で、^{一一六〇}自分の方を向くくらいことは、して呉れてもよさそうなものだったのに、とかなんとか言ったようですが、どうでもこうでも理由を見つけないなら、^{一一六〇}全く愚にもつかない作り事だったのです。

クリセイデが答えて言いますには、

「殿下、そのようなことがあったにしても、何も悪意があったわけじゃございませんし、何でもないじゃございません？ 誓って申し上げますけれど、わたくしの心には一点のやましい所もございませんわ。ただ今のお話など、全くつまらないことだと存じますわ。子供の妬み^{ねた}ごっここの真似など遊ばすお積り？ 如何でしょう、潔く兜^{かぶと}をおぬぎ遊ばしては。」

クリセイデを怒らせてはと、心も消え入らんばかりの思いで、^{一一七〇}トゥローイラスは悲しそうに歎息して言いました。

「ああ、ぼくの悲しみに同情して下さい、愛するあなた。クリセイデさん！ ぼくの言ったことに間違いがあるなら、二度とそのような過ちを犯さないようにしましょう。とにかく、好きなようにして下さい。どうなさろうが、ぼくはあなたのお心のままなんだから。」

ジェフリ・チャーサー作トゥローイラスとクリセイデ（その六）

クリセイデは答えました。

「罪には慈悲をすることがございますわ。ですから、わたくし、すべてをお許し申し上げますわ。今夜のことをいつまでもお忘れなく。そうして、今後は二度とお間違いのないように、お氣をつけたいただきたいと存じますわ。」

「決して二度とは、愛するあなた、たしかに。」

「ご心配おかけ致しまして、どうぞお許し下さいませ、愛する殿下。」

この言葉を聞いてトゥロイラスは狂喜しましたが、全然悪意がなかったこととて、すべてを神の手に委ねたのでした。そして、突然意を決したかのように、クリセイデを両腕にしっかりと抱きしめました。パンダラスは親切にも氣を利かせて、自分の寝室に引きさがろうとして言いました。

「いいですか、今ここで氣絶などなさっては駄目ですよ、人がどやどや起きて来ては困りますからね。」

はい、かの足につかまえられた雲雀に何が言えるでしょうか、——よし、一年間ぐずぐずして居たところで、わたしは結局いつかは、わたしの話を甘美なものとお考へになる方もあり、にがにがしいものとお考へになる方もあるでしょうが、その方々に、原作者の筆の跡を辿りつつ、この二人について、さきにその悲しみの次第を述べたように、その喜びについてお話ししなければならぬのです。わたしはこう申し上げられるのみです、——このように抱きすくめられるのを身を感じたクリセイデは、文人たちが昔の書物にしろしたところに依りますと、トゥロイラスが両腕に抱きしめるのを感じて、はこやなき白楊の葉のように身を震わせたのです。けれどもトゥロイラスは、はげしい苦惱も去って元氣になり、聖なる七人の幸福の女神たちに感謝を捧げたのでした。このように散々思い悩んだのちにこそ、人は天国に導かれるものなのです。トゥロイラスはクリセイデを両腕に抱きすくめて言いました。

「ああ、愛するあなた、紛れもなくあなたは、今ぼくの掌中にあるんだ、今ここに居るのは、ぼくたち二人だけなんだ！ 僕の言うとおりにして下さい、そうするより仕方がないんだ！」

クリセイデはすぐ答えました。

「愛する殿下、とっくにお従いしてるじゃございませんか、でなければ、今ここにこうして居られるわけがございませんわ。」

熱病やそのほかの重病が癒えるためには、苦い薬を飲まなければなりません。このことは人のしばしば経験するように、紛れもない事実なのですが、喜びを得るためにも、人はしばしば苦しみと大きな悩みを飲み乾すものです。わたしが今こで言おうとするのは、こう言うことなんです、つまり、今度の出来事について言えば、苦しみを経てのちはじめて、トゥロイラスの心が全く癒やされたのだということなのです。^{一一三〇}そして、その前に苦杯を嘗めただけに、今や甘美はひとしお強く感じられるのでした。悲しみから抜け出て、今や二人は喜びの中へ漂い入りました。しかも、生れてこの方、味わったこともないような喜びです。このような状態は二人が破滅してしまうより、ずっといいことなのですから、苦境に陥った場合、ぜひともこのように行動するように注意していただきたい、すべての女性にこのように望む次第です。

恐怖と悲しみが全く消え失せたクリセイデは、トゥロイウスの誠実と純真な気持を知った時、彼を信頼すべき当然な理由もあることとて、見ていると楽しくなる程、彼に愛想を尽くすのでした。^{一一三〇}美しい忍冬が無数の蔓で木の周りにぐるぐると巻きつくように、二人は互に腕を絡み合わせました。若い羞んだ夜鶯は歌いはじめるとき、最初のうちは、羊飼の話声や生垣で誰かの身動きする物音が聞えると鳴きやみますが、のちには自信たっぷり二四〇に声高く歌うものです。丁度そのように、恐怖が去ってしまつと、クリセイデは胸襟を開いて、心の思いをトゥロイラスに語るのでした。死が準備せられているのを知つて、どうやら死ななければならないところに、突然救いの手が延びて死を免れ、死から安全へと導かれる人のように、今やトゥロイラスは正真正銘喜びに浸りました、愛人は今、彼のもののなのです。ああ、今後彼が不幸になるのを見たくないものです。クリセイデの繊細な両腕、すらりとした柔い背中、のびやかで豊満で、すべすべした白いからだの両側を、彼は愛撫しました。^{二五〇}そうしてまた、その雪のように白い喉、盛り上った可愛らしい胸に、幾度となく感嘆の声を上げました。このように至上の喜びに浸りながら、彼は数え切れない程接吻し、嬉しさのあまり、どうしていいのかわからないといった様子です。かくて彼は言いました。

「ああ、恋の神よ、慈悲の神よ、あなたの次に、あなたの母君である美しいシンリニア、^{二六〇} 憐み深い星ヴィーナスをも讃えることに致しましょう。そうしてその次に、ハイメンよ、あなたに敬意を捧げること致しましょう。あなたたちに深い悲しみから救っていただいたわたくし程、あなたたち神々の御恩を受けた者はいないのでから。慈悲深い恋の神よ、聖なる結びの神よ、何びともあれ、あなたの御恵みを求めながら、あなたを敬うことを喜ばない者、そうです。^{二七〇} そのような者の希望は、翼なくして飛ぼうとするのです。わたくしは確言致します、あなたに最もよく仕え、何時も何びとも勝つて、労を惜しまない人たち、そのような人たちを、あなたが慈悲深く助けようとなさらないならば、そし

て、あなたのご慈悲がわれわれの真価を凌駕しないならば、すべては破滅することでしょう。あなたの御恵みを受け得べき数に入れられた者たちのうちで、一番御恵みを受けるに値しないわたくし、^{二七〇}そのわたくしが死にそうになった時、あなたはわたくしをお助け下さって、如何なる幸福もそれを凌駕することが出来ないような、すばらしい境涯にわたくしをお置き下さったのですから、あなたのご慈悲とすぐれた御力に対して、賞讃と敬意を捧げたいものと念ずるのほか、申し上げべき言葉とて知りません。」

こう言って、彼はすぐさまクリセイデに接吻しましたが、クリセイデとて、それを不愉快だと感じた筈はありません。トゥロイラスは更に言葉をつづけました。

「愛するあなた、どうすればあなたを喜ばせることができるだろう、それが知りたくて仕方がないんです。ぼくほど心の満ち足りた者が、今までにいたでしょうか。^{二八〇}だって、これまでに見たこともないような麗人佳人が、ぼくに心を寄せて下さるんだもの。正当以上の慈悲とは、まさ

にこのことだ。あなたのような美しい方にふさわしくないぼくには、このことが体験として、しみじみ感じられるんですよ。だけど愛するあなた、ご慈悲で以て、こう考えていただきたい、つまり、つまらない男であるにせよ、光栄にもあなたにお仕えることによって、必ずやぼくが幾分でも向上するに相違ないって風にね。愛するあなた、^{二九〇}たしかに神は、あなたに仕えさすために、ぼくという男をおつくりになったんだか

ら、いや、それはつまり、ぼくを生かすのも殺すのも、あなたのお心のままで、あなたをぼくの命の舵手たらしめようというのが、神のお心なんだからって意味なんですが、どうすれば、ぼくがあなたの感謝を勝ち得るに値するかってこと、そのことをぼくに教えていただきたいんです。そうすれば、無智無能振りを發揮して、あなたのご不興を買うようなことをしないで済むだろうと思うんですよ。

清楚な優しいあなた、^{三〇〇}ぼくは今、きっぱり言います。ぼくの生涯を通じて、ぼくは誠実と精励をご覧に入れます。そして、あなたの禁を決して犯さない積りです。あなたの居る時にせよ、居ない時にせよ、万一ぼくが、そのような真似をするようなことがあれば、後生です、その行為に対して、ぼくの命をお取り下さい。女性としてのあなたのお気持ちに適うなら、是非そうして下さい。」

クリセイデは答えました。

「わたくしの心の喜び、わたくしの慰みのみなもと、わたくしの愛する殿下、お礼の言葉もございませんわ、だって、殿下のお言葉に、わたくし全幅の信頼をお寄せしたいと存じますもの。でも、このようなお話はよしに致しましょう。もう此処でたっぷりお話ししたのですから。た

だ一言で尽くせるわたくしの気持、悔いることなく喜んで殿下を！ わたくしの騎士様、わたくしの平和、わたくしの満足！」

二人の喜び、いや、その一端すら、わたしの文才を以てしては、表わせそうにもありません。二人が如何に心から打ち興じたかは、このような歓喜の饗宴に列した経験のおありの皆さんのご判断にお任せすることにしましょう。わたしに言えることは、ただ、このようにして二人は夜の夜、不安と安心の間をさまよいながら、恋の素晴らしさをしみじみ味わたのだということだけなのです。

ああ、二人が長らく求めて来た幸福の一夜よ、お前こそ二人にとって、如何ばかり楽しかったことだろう！ そのような幸福の一夜を、^{一三三〇}そう、その時の喜びの最小の一片すらを、どうしてわたしは全精神を打ち込んで購わなかったのだろうか？ 邪惡な侮蔑よ、恐怖よ、立ち去れ、そして二人をこの至福の中に留らしめよ、わたしの筆舌の遠く及ばないこの至福の中に！

実際のところ、原作者がその才筆で書き連ねたようにすべてを余さず語り尽くすということ、そのようなことはわたしの力の及ぶところではないのですが、原作者の言葉は隅々まで残らずお伝えして来ましたし、今後必ずお伝えする積りです。恋の神に敬意を表するのあまり、もし、わたしが最善の表現をと思つて加筆した言葉がありますならば、^{一三三〇}読者の皆さんにおかれて、その部分を如何ようにでもお取扱ひ下さい。この物語の各部分に亘るわたしの言葉はすべて、恋の道の情感豊かな皆さんのご叱正のもとにその筆を進めるのであり、わたしの言葉の添削は、皆さんの賢明なご判断に委ねる次第でありまして、どうぞよろしくお願い致します。それはさておき、さきにお話ししていた物語の要点に戻りましょう。

さきに、二人が腕を絡み合せているところまでお話し致しましたが、この二人は離ればなれになることをひどく嫌い、^{一三四〇}お互に相手から引き離されてしまひはしないかと気にするのです。いや、この現実がすべて愚かな夢に過ぎないのではないかということが、二人の最大の恐怖であつたと言えましょう。ですから、二人とも繰り返し言いました、「ああ、愛するあなた、今あなたをこうして抱いているのでしょうか、それとも、夢を見ているのでしょうか？」ああ、トゥローイラスはクリセイデの顔から目を逸らさないで、優しく見つめながら言うのですた、「愛するあなた、あなたが今ここに居るということ、それに間違いはありませんね。」クリセイデは、「たしかに、愛するあなた、ああ、神様、御恵みを感謝致します」と言いながら、^{一三五〇}トゥローイラスに接吻しました。彼は喜びのあまり、魂抜けて上の空^{うわ}でしたが、クリセイデの両方の眼に何度も接吻しながら言いました、

「ああ、澄んだ二つの眼、ぼくをこんなに悲しませたのは、お前たちなんだ、ぼくの愛する人のつつましやかな捕え網！ お前たちの表情の中に慈悲という字が書かれているかも知れないが、全くのところ、テキストがむずかし過ぎて、ぼくには見つけれないよ。縛る紐もないのに、よくぼくが縛れたね、お前たちに。」

そう言いながら、彼はクリセイデを両腕にしっかりと抱きしめて、尽きせぬ溜息の嵐です。悲しみのあまり洩らすとか、病気の時に洩らすとかいうような、悲痛な溜息ではなくて、好ましい安らかな溜息で、心の中の彼の愛情のあらわれでありました。そのような溜息を、彼はどうしても抑えることが出来なかったのです。そのすぐ後で、二人は今度の事について色々要談し、また、打ち興じつつ指輪を交換しましたが、それにとのような題銘が刻んであったかは分り兼ねます。わたしが確かに承知しているのは、ハート形のルビーが嵌め込まれていて、金色と空色を配したブローチを、クリセイデがトゥロイラスに贈ったということ、そのブローチをクリセイデが彼のシャツにつけたということです。

ああ、恋を非難し軽蔑する貪慾漢、卑劣漢に、彼等が掻き集めて貯め込み得る金銭から、あるひと時、ある状態の恋が与えるような喜びの与えられたことが、嘗てあったとお思いでしょうか、いや、断言しますが、貪慾漢はそのような至上の喜びを、決して持つことはできません。^{一三八〇} 持てるんだ、彼等はどう言うかも知れません。しかし、それは真赤な偽りです。悩みと心配に心が一杯の、^{あぐさ}齟齬する貪慾漢の虚言です。彼等は

恋を気違沙汰だとか、おめでたいことだと言いますが、この連中はやがて金銀を失って、悲歎に暮れることでしょう、わたしは皆さんにこうご忠告致します。その場合、神が彼等に不幸を与え給い、世の恋人たちを、その誠実ゆえに、ますます幸福ならしめ給わんことを！^四 恋の献身を蔑む卑劣漢たちが、貪慾極まりないマイダスのように、長い耳を持ちますように。^{一三九〇} さらにまた、その邪惡な慾望のために^三クラサスが吞まなければならなかったような強烈な熱湯を、彼等が吞み乾しますように！ そうすれば、彼等こそ惡徳者であって、彼等は世の恋人たちを馬鹿だと思っているものの、この人たちは決して悪い人たちじゃないんだということを、彼等に思い知らせることが出来ることでしょう。

さて、わたしが皆さんにお話ししている二人は、心が落着いて来るや、相語り打ち興じ、また、どのようにして何時何処で、二人がはじめて知り合ったかという話を話し合ったり、今は過ぎ去った悲しみと恐怖を、一つ一つ挙げて語り合ったりするのです。^{一四〇〇} 有難いことには、そのような苦悩は今やすべて喜びに変わったのです。そのような過ぎし日の苦しみに話が触れる度毎に、接吻のためにその話とはぎれ、すぐさま新しい喜びに変わりました。今や二人は一心同体なので、喜びを取りもどして打ち寛ぎ、過ぎ去った悲しみを喜びで埋め合わせようと極力つ

とめるのでした。今わたしは、眠ることなど口にしない方が利巧なようです、睡眠だの何だのと言うことは、今の場合にぴったりしません。
一四一〇
たしかに二人は眠るなんてことを、殆ど考えてみもしなかったのです。自分たちにとって価千金のこの一夜が、ゆめゆめ空しく過ぎ去らないようにと、夜を徹して喜びに浸り、いともいみじき事どもに余念がなかったのです。けれども、衆人に時を告げる雞が羽ばたきして鳴き、昼の先触れたる暁の明星が現われて光を投げかけ、水がめ座、ペガサス座の星々が東の空に昇って、知る人の目にそれと知られはじめると、クリセイデは忽ち悲しくなって、トゥロイラスに言うのでした。
一四二〇

「わたくしの心の命、信賴的、喜びであるあなた、まあ、嫌なこと、なんて悲しいことなんでしょう、朝が来て、どうしてもお別れしなければなりませんわね。だって、もう起きてこの部屋を出なければならぬ時刻なんですもの、そうしなければ、わたくし、これからずっと面目を無くしてしまうことになりますわ。ああ、夜！ どうしてお前は長くわたしたちの上に居てくれないの？ アルクミーナがジョーヴと一緒に寝た夜のように。ああ、暗い夜！ 書物に書いてあるじゃないの、お前の黒い着物で、暫くの間この世を包み隠すようにって思召して、神様はするをお造りになったんだわ、そして、その黒い着物に覆われて人間は、休息することが出来るんだわ。昼が苦しみでわたしたちを悩まそうとお前時が来ると、お前はいつもこのように逃げ去って、わたしたちに休息を許してくれないのね、動物たちが愚痴をこぼし、人間がお前を責めるのも、当然じゃなくて？ ああ、ほんのちよっぴりしかお務めをしないのね、あわてん坊の夜！ お前のそっかしさ、不親切さったらありやしない、だから、
一四四〇
お前が地の下で廻らないようになって、自然をお造りになった神様が、お前をわたしたちの半球に、何時までもしっかりお縛りつけになればいいのに！ だって、わたし、こんなに慌しく喜びを失ってしまうんだもの、お前が駆足でトゥロイの町から逃げ出すばかりに。」

この言葉を聞いてトゥロイラスは、こんなに大きな喜びから、こんなに大きな悲しみが湧き出るのを、経験したことはなかったこととて、哀れにも苦悩のあまり、胸の奥底から血の涙が溶けて流れ出るような気がしました。彼は愛人のクリセイデを両腕にしっかりと抱きしめてこのように言いました。

「ああ、
一四五〇
残忍な昼！ 夜と恋が奪って来て、隠していた喜びを、お前は曝け出そうとするのだ！ お前がトゥロイの町にはいり込んで来るなんて、ぞっとするよ、だって、隙間という隙間から、お前のぎらぎらした眼の一つが覗き込むんだから。嫉妬深い昼！ 何をそんなに嗅ぎ出そ

うとするんだい？ 何無くしたって言うんだい？ どうして此処を捜そうとするんだい？ 神が慈悲で以て、お前の光を消して下さればいいのに。ああ、意地の悪い昼！ 世の恋人たちが、お前にどんな悪いことをしたって言うんだい？ 地獄の苦しみを受けろ！ だって、お前こそ沢山な恋人たちの命を奪ったんだし、これから奪う積りでいるんだから。お前がはいり込んで来るから、恋人たちのいる場所がなくなるんだ。どうしてお前はここで、光を売り出そうとするんだい？ 小さい印章を彫る人たちの所に売りに行けばいいんだよ。ぼくたちはお前が嫌いなんだ、日の光には用はないんだよ。」

それからまた、彼は目の神タイタンを責めて言いました。

「馬鹿者！ 人びとがお前をけなすのも当然だよ、だって、お前は暁の女神と一晚中一緒にいるのに、女神があわただしくお前の側から起き上って、今のぼくたちにするように、世間の恋人たちを苦しめるのを黙って許すじゃないか。そうだ、いつまでも寝ているんだよ、お前も暁の女神も！ お前たち二人に悲しみを与え給えて、そうぼくは神に祈るよ。」

そう言って大きな溜息をついた後、彼は更に言葉をつづけました。

「ぼくの幸福と不幸の泉とも根とも言うべきあなた、ああ、愛するクリセイデさん、ぼくは起きなければならぬですか、どうしても？

ああ、心臓が裂けそうだ、だって、ぼくは一時間でさえ離れては生きて居られそうにもないんだ、あなたあつての、ぼくの命なんだもの。どうすればいいだろう？ どうすれば、そして何時また、こうしてあなたと一緒にいる機会が得られるだろう、全く見当がつかないんだ。ぼくの命

は一体どうなるだろう、だって、今でさえ、あなたが好きで好きで、むずむずするくらいなんだから、あなたの所にまた戻って来られなければ直ぐ死んでしまいますよ。ああ、あなたから長く離れて居ることなんて、とても出来っこない！ だけど美しいあなた、ぼくがあなたを心の中

でしっかり抱いて居るように、あなたがぼくを、あなたのつつましい下僕しもべであり、騎士であるぼくを、あなたの心の中でしっかり抱いて居て下さるってこと、そのことを確信することが出来るなら、——ああ、全くのところ、ぼくはこの世界を二つ持つより、その方を望むんだ——、もしそうなら、ぼくは、それだけよく、すべての苦痛に堪えることが出来そうですよ。」

クリセイデは溜息をつきながら、すぐ答えました。

「愛するあなた、本当にもうこうなつては、クリセイデの心から、トゥローイラス様の方がお消えになることは決してございませんわ、太

陽がその軌道から落っこちて来ても、鶯という鶯が鳩と番^{つが}っても、岩という岩がその位置から動いても。わたくしの胸の奥深くに、あなたのお姿が刻み込まれて、^{一五〇〇}そのお姿を心から払いのけようと思っても、わたくし出来そうにもございませんわ、拷問にかけられて死ななければならなくても、とても駄目ですわ。後生ですから、わたくしのこと以外はお考えにならないように、でなければ、わたくし死んでしまいますわ。お願いでございます、わたくしがあなたを、心の中でお抱きして居ますように、わたくしをあなたのお心の中で、しっかりお抱き下さいませ。お抱きただいてるんだってことが、本当に分りまんなら、もうそれ以上、わたくしをお喜ばせ下さることは出来ませんわ、神様にだって。」

^{一五一〇}愛するあなた、これ以上何も申し上げないことに致しましょう。どうぞ、わたくしに対してご誠実をお持ちつづけ下さいませ、でなければ、そんな悲しいことはございませんわ、あなたのわたくしなんですもの、正真正銘。あなたのわたくし、ですから、どうぞお喜び下さいませ、そしてご安心下さいまし。このようなこと、わたくしまだ一度も申したことばでございせんし、今後も外の方には決して申しませんわ。今お出かけになって、すぐまた此処にお帰りになれば、さぞかし嬉しいことばでございましょう。でも誓って申し上げますわ、またすぐお目にかかりたいってことは、わたしだって同じことですわ。」

そう言いながら、クリセイデは彼を両腕に抱いて、接吻を繰り返すのでした。

^{一五二〇}心進まないながらも、己むを得ないこととて、トゥローイラスは立ち上って、すばやく身支度を整え、美しい愛人を何度も何度も両腕に抱きしめたのち、急いで帰途につこうとしましたが、悲痛極まりない声で言うのでした、「さようなら、愛するあなた、またすぐ、無事でお会いしたいものですわ。」クリセイデは彼と別れるのが辛くて辛くて、悲しさのあまり、一言すら答えることができません。トゥローイラスは王邸に向いましたが、^{一五三〇}全くのところ、その悲しみはクリセイデに劣りません。楽しかった愛人の所へ、今一度戻りたいものだ、切々の情に心は痛み、どうにも思い切れないのでした。やがて王邸に帰って来ますと、こっそりベッドにもぐり込んで、何時ものとおりの、長い間眠ろうとするのです、とても駄目です。横になって目をしょぼしょぼさせて居ましたが、眠れそうにもありません。思い焦がれていたクリセイデが、思っていたより幾層倍もすばらしい女性だということ、そのようなことを考えていたからです。頭の中をぐるぐる巡るのは、クリセイデの一言一句、あらゆる表情です。そして、味わった喜びの端々に至るまで、彼は心の中にすっかり刻みつけるのでした。実際、このように思い出していると、新たに思慕の情が燃えさかり、最初にも増して恋情が募って来るのですが、彼はその激情を敢えて抑えようとはしないのでした。クリセイデと

て、思いは全く同じことで、^{一五五〇}トゥローイラスの立派なこと、その楽しそうな様子、賢明な挙動、優しさ、彼と会った時の有様など、あれこれと心ひそかに思い浮べているのでした。そして、自分をかくも幸福にし給うた恋の女神に感謝し、もう一度愛人と座を共にして、彼を愛想よくもてなせるようになればいいのにと切望しました。

翌朝パンダラスは姪の所に赴いて、叮嚀に挨拶してのち言いました。

「ゆうべは一晚中どしゃ降りだったね。全く気がかりだったよ、お前が眠る暇も夢を見る暇もないんじゃないか。この雨で^{一五六〇}ぼくも夜通し、一睡も出来なかったくらいだから、頭痛を訴える人があると思うね、きっと。」

彼は姪の方に近づいて行って、更に言葉をつづけました。

「どうだね、気持のいい朝なんだが。どう、お前、気分は？」

クリセイデが答えて言いますには、

「お蔭様で散々ですわ、狐もいいところよ、叔父様ったら。罰が当たりますように！ 尤もらしく仰有って、今度のことはすっかり叔父様のお仕事なのね、きっとそうだわ。誰だっで見損いますわ、叔父様を。」

こう言いながら、クリセイデはシートで顔を隠し、^{一五七〇}恥ずかしさのあまり真赤になりました。パンダラスは、シートの下を覗き込みながら言いました。

「クリセイデ、ぼくを生かしておけないって言うのかい？ それなら、さあ、ここに刀があるよ、ばっさりやって貰いたいね、ぼくの首を。」

そう言いながら、パンダラスは突然姪の首すじに両腕を延ばして接吻しました。言わでもことは省略することに致しましょう。さて、^{一五八〇}キリストは磔の罪をお許しになりましたが、クリセイデも叔父を許し、叔父と打ち興じはじめたのでした。そうしてはいけないという理由も別段なかったのですから。とにかく、^{一五九〇}話の結末に急ぎましょう。帰る時刻にもなりましたので、クリセイデは帰途につき、かくてパンダラスは全く所期の目的を果たしたのでした。

再びトゥローイラスの事に話を戻しましょう。彼は落着かない気持で、長い間ベッドに横たわって居ましたが、ひそかにパンダラスに使いをやって、出来るだけ急いで自分の所に来てもらいたいと頼みました。パンダラスはすぐやって来ましたが、未だ嘗て嫌だと言ったことのない男な

のですから。いともしかつめらしくトゥローイラスに挨拶してのち、彼のベッドの傍に腰を下しました。^{一五九〇} トゥローイラスは能うかぎりの友情を籠めて、パンドラスの前に跪き、何度も何度も言葉を尽くして礼を述べた後、やっと立ち上って、君が居てくれたればこそ、窮地を脱し得たのだと、感謝しながら言いました。

「ああ、最良の友パンドラス君、全くのところ、君こそぼくの魂を^{一六〇〇}あの地獄の火の川フレゲソンから救い上げ、天国に導いて憩わせてくれたのだ。たとえ、ぼくが君に仕えて、一日に千回も命を捧げることが出来るとしても、それで充分だなんて、これっぽっちも言えないよ。ぼくがいま、全身を捧げている、いや、今後死ぬまで捧げる積りでいるクリセイデさん、そうだ、あのクリセイデさんくらい素晴らしい麗人佳人は、全世界を見渡すことのできる太陽だって、未だ嘗て見たことがあるまい、このことは断然保証できるよ。敢えて言うが、ぼくがこうしてクリセイデさんに全身を捧げ得るのは、恋の神の徳の賜物であり、^{一六一〇}また、君の親切な尽力のお蔭なんだ。君がぼくの為に尽くしてくれた骨折は並大抵なものじゃない、それに対して、ぼくは永久にぼくの命を君に捧げなければならないのだ。だって、君の助力があつたればこそ、ぼくは今こうして生きて居られるんだもの。でなければ、とっくの昔に命はなかつただろうからね。」

こう言つて、彼はベッドの上に身を伏せました。パンドラスはトゥローイラスの言葉が終るまで、深刻な面持で聴いていましたが、答えて言いますには、

「親愛な殿下、もし、ぼくが何かあなたのお役に立ち得たとすれば、たしかに、ぼくも満足です。^{一六二〇} いや、それどころじゃない、これほど嬉しいことはありませんよ、全く。ところで、こう申し上げちゃ何ですが、お氣をつけ願いたいことがあるんです、それはですね。いま折角幸福におなりになったのに、自らみすみす、それを取り逃してしまふというような、不幸な事態をお招きにならないようにってことなんです。だって、苛酷^{一六三〇}な逆境にもいろいろありますが、得意の絶頂にあつた男が、幸福が過ぎ去ってしまったのち、何時までもそれが忘れられないっていうこと、これこそ、不幸中の不幸と言うべきですよ。賢明な殿下のことですから、決してへまはおやりにならないように。今でこそ、いいお氣持でいらっしゃるけれど、決して軽はずみなことはなさらないように。だって、もし軽卒なことをなされば、それこそ大変なことになりますよ。今はご満足の境地にいらっしゃるんですが、そのご心境を何時までもしっかりお持ちつづけになるように。これは火を^{一六四〇}睹るより明らかなことなんです、保持^{一六五〇}は獲得に匹敵する一大技術なんですからね。言葉と感情をいつも統御抑制して下さい。だって、この世の喜びなんてものは

ただ一本の針金でもってるに過ぎないんですからね、だからこそ、何時もぶつぶつ断れるんですよ。ですから、ぼくたちはそれを大事にそっと取り扱わなきゃいけないんですよ。」

トゥローイラスは答えました。

「親友のパンダラス君、約束しよう。今の、へまをやって損をするってことなんだが、ぼくは絶対にそんなことのないように善処するよ。あの女の感情を害するような、軽卒な真似は絶対にしない積りだ。この点については、何度も大げさに言わないでくれ給え、だって、パンダラス君、もし君がぼくの心を充分知ってくれるなら、たしかに、この点に関してはあまり心配してくれなくてもいい筈だよ。」

それから彼は、楽しかったあの夜のことや、最初のうちはどんなことを、どのように心配したかということなどを、パンダラスに語ったのち、更に言葉をつづけました。

「君、正真正銘、偽らざる告白なんだが、今の半分も感情が湧き立ったことは一度もないよ、これまでに。しかも、あの女を根かぎり愛しようと、わくわくすればする程、ますます嬉しくなってきたんだよ。自分自身にも、その正体がよく分らないんだが、今ぼくは、何だかこう、新しい性質の、そうだ、以前とは全く別な種類の熱情を感じるんだかね。」

パンダラスは答えて言いました。

「ひと度天国の幸福を享け得た者は、確かに、はじめ天国の幸福について聞いた時とは別な感じを持つものですよ。」

これを要するに、トゥローイラスは今度の事について存分話し切れず、愛人の懇情をパンダラスに向って充分褒め切れず、また、パンダラスに感謝して愛想を尽くそうにも、満足には出来ないといった様子でした。次から次へと新しい話が持ち出されたのですが、とうとう夜になってしまつて、己むを得ず二人は別れました。その後間もなく、運命の女神の思召しによって、いともめでたき甘美な時が訪れて来ました。それは前と同じ場所で、愛人のクリセイデと再び逢えるという知らせを、トゥローイラスが受けたということなのです。それを聞いて、彼は喜びの余り、ふらふらとなり、心から八百万の神に手を合わせました。さて、彼は幸福であり得るのでしょうか。

クリセイデとトゥローイラスの二人は、前と同じ形式、方法で落ち合ったのですから、その有様を繰り返して述べる必要はありません。それよりも、端的に要点に進みましょう。二人の気が向いた時、パンダラスは喜び勇んで自信たっぷり、二人をベッドに案内し、かくて二人は静

かに打ち寛いだのです。二人は今や一緒になったのですから、楽しからぬ筈がありません。そのようなことはお聞きになるだけ野暮というものです。だって、前にも嬉々たる有様だったのですから、今度は千倍も楽しかうじゃありませんか、疑問の余地などあったものじゃありません。悲しみも恐れも、ことごとく消え失せてしまい、実際、二人とも胸一杯の喜びを味わったのです、味わったと思いました。二人の喜びたるや、容易に言い表わせる喜びではありません。如何なる文才を以てしても言い尽くされません、何しろ、^{一六九〇}お互にひたすら相手を喜ばせようとしたのですから。賢人たちが大いに推賞した至福という言葉を用いても、この場合充分ではありません。この喜びは筆の力の及ぶところではありません、あらゆる想像を絶した喜びなのです。

けれども、ああ、悲しいかな、無慈悲な朝が近づいて来ました、暁の兆しで、それと知られたのです。それがため二人は致命傷を受けたように感じ、悲しみのあまり顔色が変わって、裏切者、^{一七〇〇}焼餅やき、いや、もっと悪い名前で、事新しく朝を呼び罵り、朝の光をひどく呪いました。トウロイラスが言いますには、

「ああ、太陽の車をひくパイロエースと外の三頭の駿馬が、たしかに今抜け道を通り過ぎたよ、ぼくをいじめようと思って。ああ、すぐ朝になるんだ。こんなに駆足で昇るんだもの、太陽なんて押んでやるものか、絶対に。」^{一七一〇}

けれども明るくなつては、どうしても直ぐ別れなければならなかったのです。語り合い、睦み合つてのち、何時ものことながら、二人はまた逢う時を定めて、すぐ別れるのでした。このようにして、二人は幾夜も幾夜も重ね、かくて幸運の女神は、その都度しばしの間、クリセイデとトウロイの王子を導いて、喜びに浸らせたのです。

トウロイラスは心満ち足りて幸福に浸り、歌いつつ日を送りました。金も遣い、槍の試合も行ない、饗宴も催し、しばしば人に惜しみなく物を与え、衣服も度々着替え、そしてこれは確かなことですが、自分と性格のよく合った人たち、まさに元氣一杯の選り抜きの人たちを、^{一七二〇}何時も身辺に沢山従えました。そこで、彼の立派さと気前のよさを褒めたたえる声は、あまねく地の果てに及び、天の門口にまで鳴りひびく程でありました。彼は全く恋の喜びに浸って、自分ほど安らかな気持の恋人は、世界広しとは言え、またとあるまいと心ひそかに考えていたに相違ありません、このようにして彼は恋を楽しんだのでした。自然がほかのどの女性に賦与した優しさ美しさも、彼の心に張りめぐらされたクリセイデの網のただ一つの結び目をすら、解き得ないでしょう。その網は彼の心にぴったりと絡みつき、編み込まれていましたので、どの部分に於て

ジェフリ・チャーサー作トウローイラスとクリセイデ（その六）

も、それを解きはぐすことは、それこそ絶対にできませんまい。彼は度々パンダラスの手を取って、庭園に案内し、クリセイデのことについて、その女らしさ、その美しさについて、手放しの褒めちぎり方で長広舌を振うのでしたが、その話し振りが、側で聞いていても、確かにわくわくと嬉しくなるくらいでした。それが済むと、彼は次のような歌を歌うのでした。⁴²

地と海を支配し給う愛の神よ、

九天高くいまして、命じ給う愛の神よ、

導かんとの御心^みのまま、全き結合もて、

民と民とを結び給える愛の神よ、

友情の掟を定め給い、

夫婦を美德の中に住まわせ給う愛の神よ、

^{一七五〇}今語った親和、これから語る親和を与え給え。

この世は変らざる誠実もて、

調和の刻々を送り迎え、

相容れざる自然のもろもろの力は

永久^{とわ}の結合を保ち、

太陽は薔薇色^{ばら}の日々をもたらし、

月は夜々に君臨するのだ、

これみな、愛の神の御力^みによるもの、永久^{とわ}にたたえんかな、君が御力を！

飽くなく流れんとする海は、

潮うしおの流れを、ほどほどに抑制するのだ、

—七六〇—
その潮うしおの流れが狂乱して、

大地や万象ものみなを、末永く浸さないように。

かりそめにも君が手綱を緩め給うならば、

いま愛し合えるものは、皆四散して、

いま君が結び給えるものは、すべて失われるのだ。

造物主たる神に祈らんかな、

その御力みちからによりて愛の神が、すべての人の心を

絆きづなもて掬かめ、かたく結び付け給い、

何びともその絆きづなから逃れ得ざれと。

愛の神が、心冷たき者たちに、強いて愛情を起さしめ給い、

—七七〇—
かくて彼等が常に、心悩む人たちを喜んで憐み、

心まことなる人たちを喜んで守るよう、わたしは希ねがうのだ。

戦争のためにこの町が危急を告げる度毎に、トゥロイラスは何時もきまって、真先に鎧で身を固めました。書物の示すところに誤がなければ、ヘクターは別として、たしかに彼こそ、何びとも最も恐れられたのです。このように彼の剛毅と勇猛がますます加わって来たのは、恋を知ったればこそであり、クリセイデの感謝を勝ち得たいという一心から出たことで、かくてこそ、彼の心機は一転したのです。休戦の間には、馬うまを駆かって鷹狩に出かけたり、猪や熊や獅子を狩ったりするのですが、小さな獣などには目もくれなかったのです。馬に乗って彼が町に

ジェフリ・チャーサー作トゥロイラスとクリセイデ（その六）

帰って来ると、しばしば彼の愛人は、籠から出た鷹のように澁刺たる様子で、窓から下を見下して、彼に愛想よく挨拶せんものと、満を持して待ち構えているのでした。彼の話すことといえば、大抵は恋愛と美德についてであり、すべて卑劣なことを彼は軽蔑しました。実際、立派な人たちを尊敬していただきたいだの、困^{一七九〇}っている人たちを慰めていただきたいだのと、彼に乞う必要は全然なかったのです。恋をしている人が幸福に暮らして居るといことを、知るとか聞くとかすれば、彼は喜びました、というのは、実際のところ彼は、愛の神に立派に仕えなければ、如何なる人も身が破滅するのだと考えていたからです。もっとも、如何なる人もというのは、当然、恋の神に仕えなければならぬ人たちという意味なのですが。これに加えるに、彼は感情を言葉に表現することが極めて巧みで、その服装の考案も頗る風変わりでしたので、彼の言うことがすことのすべてが、素晴らしいように世の恋人たちには思われました。王家の血筋を引いてはいましたが、傲慢な態度で人をうんざりさせるというようなことは、彼の好まざるところでありました。広く何びとに対しても憐み深く、そのために至るところで感謝を受けたのでした。讃^たえんかな、愛の神の御恵^み！ 愛の神は高慢、嫉妬、憤怒、貪慾、その他すべての悪徳⁴³から、トゥロイラスが逃れるようにと、御心^みを用いられたのです。ダイオーニの娘なるうるわしい女神よ、また、盲目の、翼ある、あなたの子キューピッドよ、そしてまた、⁴⁵パーナサスの山上のヘリコンのほとりに、その住居を選んだ九人の姉妹たちよ、あなたたちはこまでわたしを導いて下さったのですが、今お別れすることになりましたので、あなたたちを永久に讃^たえましよう！と云うほかに、言うべき言葉とて知りません。わたしは、あなたたちの御力^みによって、トゥロイラスの恋の献身の成行きと、その喜びを、わたしの詩の中で詳しく語って来ました。もっとも、その中には、そくばくの恋の悩みも語られているのですが、それは原作者の述べるところに従ったまでのことです。今わたしは、このようにして、巻の三を書き終えますが、トゥロイラスは愛人クリセイデと共に、安らかに喜びに浸っているのです。

巻の三おわる。

〔注 解〕

- (23) 青い色は貞節の象徴。「騎士の従者の話」(Squire's Tale) 第六四四―五行参照。
- (24) 原文には 'every spirit' とある。中世の生理学によれば、人体には生命現象を司る三つの spirit (精気、元氣とでも訳すべきか) があり、natural spirit は肝臓に、vital spirit は心臓に、animal spirit は脳に在ると信じられた。巻の一の第三〇六―七行で、「突然彼は魂が消え入ってしまうような気がしました」と訳した個所も、原文には 'the spirit in his herte' とあり、上述の三精気の一つである。

- (25) Boethius, iii, M, 5-7 参照。
- (26) シシリーア (Cythera) はアフロダイティ (Aphrodite) すなわち、ヴィーナスのことで、キューピッドの母である。
- (27) アポロとシニウスとの間の子で、結婚の神。
- (28) ダンテの天堂界第三十三歌の第一四一五行、「み恵みを求めて、おん許に馳せざる者は、その願い、翼なくして飛ばんと思う」参照。
- (29) この個所の叙述については、ダンテの浄罪界第二十歌の第一〇六―八行、第二一六―七行参照。
- (30) フリジヤ (Phrygia) の王ゴードディアス (Gordius) の子で、貪慾漢。パン (Pan) とアポロ (Apollo) との間の、フルートと豎琴のコンテストで、パンに軍配を上げたため、アポロによって驢馬のような長耳にされてしまう。
- (31) Marcus Licinius Crassus のことで、ローマ三執政の一人、貪慾漢。刺殺されて、その首が敵に送られ、口の中に溶かした金を流し込まれる。
- (32) マイシーニー (Mycenae) の王イーレクトウリオン (Electryon) の娘で、許婚者アンフィトゥリオン (Amphitryon) の留守中に訪れてきたジョーヴ (Jove) に懐妊せしめられて、ハーキュリーズ (Hercules) を産んだ。
- (33) この個所の叙述については、Ovid: Amores, i, 13, 11 ff, 17 ff. 参照。
- (34) タイタンは、しばしば日の神と同義語として用いられるが、ジョーサーはここでは、タイタン (Titan) とティソナーナス (Titanus) とを混同している。ティソナーナスなる青年は、暁の女神オーローラ (Aurora-Eos) に愛せられたが、オーローラは夜の終り頃になると、ティソナーナのベッドから抜け出て、足の速い馬の引く兵車に乗って、中天高く舞上り、人びとに暁を知らせた。ティソナーナスはオーローラから不死の生命を与えられたが、永遠の青春は与えられなかったもので、やがて老いて、オーローラに嫌われ、こころぎにされてしまう。
- (35) この個所の修辭については、Virgil: Eclogue, i, 60-64 参照。
- (36) ルカ伝二三・三四「父よ、彼等を赦し給え。その為す所を知らざればなり」参照。
- (37) Virgil: Aeneid, vi, 550 ff. 参照。
- (38) 参照―Boethius, ii, Pt. 4, 7-10「あらゆる逆境に際して最も不幸なのは、自分が嘗て幸福であったという意識なのですから。」ダンテ、地獄界、第五歌、第一二―三行「苦しみの中に樂しき頃を思うに勝る悲しみは世にあらず……。」Tennyson, Locksley Hall: 'That a sorrow's crown of sorrow is remembering happier things.'
- (39) Roman de la Rose, 8261-64. Ovid: Ars Amatoria, ii, 11-13 参照。
- (40) 参照―Boethius, iii, Pt. 2, 10-13「福祉とは、一切の善の集合による、完全な状態を意味することは明白である」更に、Dante: Convivio, iv, 22 参照。
- (41) Pyrois, Eous, Aethon, Phlegon の四頭の駿馬が、太陽の車を引くとせられた。Ovid: Metamorphoses, ii, 153 ff. 参照。
- (42) この歌については、Boethius, ii, Met. 8 参照。
- (43) 参照―地獄に落ちる七つの罪惡 (seven deadly sins) すなわち、高慢、貪慾、色慾、憤怒、大食、嫉妬、怠惰。
- (44) ジュース (Zeus) とダイオーニ (Dione) との間に生れたヴィーナスのこと。Virgil: Aeneid, iii, 19 参照。

ジェフリ・ジョーサー作トゥローイラスとクリセイデ (その六)

ジェフリ・チョーサー作トウロイラスとクリセイデ（その六）

(45) ギリシャの中央部にある山。アポロやミュージズたちが籠り、詩歌と文芸の源泉と考えられている。

(46) ギリシャの南部にある山。この山もアポロやミュージズたちが籠ったとせられている。パーナサスとヘリコンとは、かなり隔った別々の山であるが、チョーサーは後者を前者の山上にある泉と考えたのである。同じような表現は、House of Fame, 521-2, Anelida and Arcite, 16-17 にも見える。